

安子さんの鶴

三度目の夏

また、安子さんの千羽鶴をヒロシマに捧げにきた
大正生まれの安子さんの祈りが鶴になった

ヒロシマ ヒロシマ ヒロシマ

この地に立つと、心の存在が無くなる。思考が無くなる
頭のとっぺんが、火山の噴火口のようにパツクリと開く
私の噴火口は、魂を天へと垂直に凄まじい勢いで噴き上げる
真っ青な空を突き破り、魂の光柱が天へと突き抜ける

ヒロシマ ヒロシマ ヒロシマ

安子さんの鶴は、今年も全て金色の千羽鶴だ
遠くから見ても、キラキラと、ひとときわ輝いている
昔、戦時下での嫁入りは、嫁入り道具すら配給切符で買ったそうだ
だんな様は戦争にとられ、終戦後はシベリアへ
物のない時代から働きづめに働いてきた

80歳のとき、最愛の息子に先立たれ狂人となった
狂人は、紙を折り、なんとか命をつなぎ生き続けた
92歳で右手を骨折、痛む手でも折つづけてきた

「どんな時も『折紙』が私を助けてくれましたん」
と、95歳の彼女は笑う

今日もまた、鶴を折り続け
来夏に向け、祈りを捧げ続けている